

# 国際結核シンポジウムに 国際研修生と共に参加して



結核研究所国際協力部  
副部長 杉山 達朗

7月24、25日に開催された国際結核シンポジウムに、結核研究所でストップ結核アクション研修を受講している国際研修生16名と共に参加した。シンポジウムに自分自身の参加と、研修生に国際シンポジウムを経験させる引率としての2つの目的をもって臨んだ。



国際結核シンポジウムの会場の様子

まず驚かされたのはシンポジストや参加者で、ストップ結核パートナーシップ日本のスケールの大きさであった。結核予防会総裁秋篠宮妃殿下をはじめ、国会議員の先生方、外務省、厚生労働省、国際協力機構など、オールジャパンとして結核対策に取り組むという姿勢が前面に押し出されていたと思う。この中で、結核予防会が秋篠宮妃殿下総裁の下で、過去の日本の経験に基づいて国内外の結核対策へ取り組んできたことが示され、同伴した研修生にもそれが良くわかったようで、研修講義の中で教えられた内容が具体的にオールジャパンとして国際的に臨んでいることが語られていたことに感心していた。また、世界基金や世界保健機関などトップレベルのパネリストの発表を聞くことができたことは、国際シンポジウムならでのことであろう。多くの研修生は、世界基金からの資金を利用して結核対策の仕事はしていても、その概要と仕組みまでは知らなかったもので、今後の自国の計画立案に多少なりとも寄与できることを期待したい。



世界エイズ・結核・マラリア基金のラッサーリ氏

シンポジウムのパネルディスカッションを運営していく上で大事な役割を果たす議長の仕事にも

驚かされた。討議に花が咲けば咲くほどトピックが末広がりになりまとめることが難しくなる中で、



1列目は左からブルックマン氏（オランダ）、ラガヒッド氏（フィリピン）、エルソニー女史（IUATLD）、加藤結核研究所副所長

発表者の意見を集約して討議内容に「流れ」を作りながら最終的に問題点や結論をあぶり出していく形を取っていたのは、議長の采配によるところが大きい。後日談になるが、この采配手際のよさに感動した研修生は、研修最後に行われるプレゼンテーションで座長の役割も担当することになっていたが、セッションを厳格に仕切る傾向を前面に出していた。研修当初に国別報告の座長を任された時とはまったく違って確信をもっている彼らを見て、私は思わず苦笑してしまった。短い討議時間の場合、ワークショップや会議運営の中で座長が重要な役割を果たすことを彼らは十分学んだ、ととらえたい。



一番奥の列が研修生の席でした

WHO西太平洋地区のTAG会議後のシンポジウムということもあって一部のゲストスピーカーを除いて参加者のほとんどがアジアからであった。これだけの国際シンポジウムだからもう少しアフリカからの参加者がいてほしかった、という研修生の感想がある。ストップ結核パートナーシップ日本として国際的に出て行く中、自国への支援を増やしてほしいという願いもこめての意見と思われたが、今後、国際結核肺疾患連合会議（IUATLD）などで更にストップ結核のネットワークを広げ、日本との連携を深めて結核対策や研究分野での共同作業が行えることを期待したい。